

# 超臨場感コミュニケーションの近未来像

## 特集編集にあたって

編集チームリーダー 荒川賢一

本特集号では、「超臨場感コミュニケーションの近未来像」と題して、昨今特に進展が目覚ましい、コミュニケーションにかかわる臨場感を高めるメディア処理技術などについてまとめてみた。これは設立以来約3年がたつ「超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム(URCF)」の活動を基に、他の超臨場感の話題も加えたものである。

さて「臨場感」の定義を「あたかもその場にいる(臨んでいる)ような感覚」とすると、「超臨場感」という言葉の意味は「その場にいる以上の感覚」となってしまう、いささか矛盾しているように響く。しかし1-2に定義されているように、超臨場感の意味は、①「超高」臨場感、すなわち今まで成し得てきた臨場感の高さを超える、または②臨場感を「超越」、すなわち臨場感を加工し強化する、という概念である。特に後者はコミュニケーションにおける壁を越えるための大きなヒントになる概念であり、また1-1に述べられているように文化を創造する技術的可能性をもあわせ持つ概念でもある。

本特集の内容であるが、まず1章では超臨場感コミュニケーションにかかわる研究の総論というべき、その方向性について述べて頂いた。原島先生には超臨場感メディアが文化を創造し得る学問であることを提言して頂き、また榎並氏、岸野先生には超臨場感にかかわる研究開発の進むべき壮大な方向を示して頂いた。

2章では、主要な超臨場感メディアである映像にかかわる技術について解説して頂いた。特に、超高精細映像及び立体映像のシステムについて、また多視点映像やパ

ノラマ映像のサービスについて、5編の記事にて現状の技術到達点を中心に述べて頂いた。

映像に対して、超臨場感メディアの双対をなすのは、音響である。3章においては、鈴木氏、西村氏には音の発生源の位置が同定できる超臨場感音響にかかわる技術について、また安藤彰男氏には空間における音の広がり自体を再生する音場再生技術について、それぞれ解説して頂いた。

4章では、映像・音響に対応する視覚・聴覚を含む人間の五感に訴える超臨場感メディアと認知機能に関する技術の最前線について解説している。河合先生には立体コンテンツの認知に関する技術を解説して頂き、また安藤広志氏には超臨場感メディアに関して、人間の五感をはじめとする多感覚の測定手法と幾つかの実験について解説を頂いた。

最終の章である5章では、超臨場感によるコミュニケーションをサービス面、システム面から解説する記事を集めた。5章には、同室感、テレワーク、そしてユビキタス表示での超臨場感の実現について、解説をそれぞれ頂くとともに、今後のシステム化に関する課題などを紹介して頂いた。

このように本特集では、超臨場感を各種感覚にかかわるメディアの面から解き明かすだけでなく、システム・サービス面にまで踏み込み、全体像を示すことを試みた。これにより、超臨場感コミュニケーションの技術の現状とそれが進んでいく方向性を具体的に理解できると思う。

最後になったが、多忙な中、本特集の各記事の内容を真摯に御検討頂き、また御執筆頂いたURCFメンバーをはじめとする皆様、そして、この企画を進める上で御尽力頂いた岸野先生を含む特集編集チーム及び学会事務局の皆様に感謝の意を表したい。

### 特集編集チーム

荒川 賢一	岸野 文郎	横井謙太郎	大西 正輝	麻生 英樹	伊藤 建一
井上 晃	植野 研	岡崎 篤也	加藤 晴久	加藤 由花	永岡 隆
中藤 良久	張山 昌論	広津 鉄平	福田 和真	舟生日出男	古家 賢一
堀田 悦伸	望月 貴裕				